

8504 私が再び真珠ホテルを訪れたのは・・・

私が再び真珠ホテルを訪れたのは、それから二年後になる。

今度は冬であった。

伊勢の風は意外と冷たくきびしい。しかし陽はうらうらと温く、部屋にいる限りそこには冬の気配も感じられなかった。

私は若い女中さんに桐山さんることを尋ねた。桐山さんは亡くなっていた。まだまだ死ぬ年の人ではなかった。心臓が悪かったのだという。私は暫くおどろいて言葉がでなかつた。

曾我 綾子『真珠ホテル』

[許容訳例]

It was two years later that I came to the Shinju Hotel for the second time.

It was winter this time.

In Ise the wind was colder and severer than I had expected. The sunshine, however, was so mild and warm that while I was in my room I had no sense of winter.

I asked the young maid how Mr. Kiriyama was getting on. She said he had passed away. He'd been too young to die, I thought. According to the maid, he'd had heart disease. Such was my surprise that I was speechless for a while.

[翻訳例]

It was two years after that I next came to the Shinju hotel.

This time it was winter.

The breeze at Ise was unexpectedly, uncomfortably cold. But the sunlight was warm and mild, and so long as one was indoors there was nothing to remind one that it was winter.

I asked the young maid about kiriyama. He had died, she said. He'd been far too young to die, I reflected. Apparently he'd had a bad heart. For a while, I was too upset to say anything.

■私が再び真珠ホテルを訪れたのは、それから二年後になる。(8504)

★「再び」は for the second time (二度目に) も可能ですが、「再び」というのは、すでに幾度か行っているけれども、前回行った時のことを基準にして「再び」ということもあります。したがって、「次に」という意味の場合も多いので、ここは next を用いるのが一番いいと思われます。I next came [went] to…のように使います。

★「真珠ホテル」は the Shinju hotel です。ホテル名には、普通、定冠詞を付けます。

★「訪れた」は「泊まりに行った」と考えるのが普通です。ですから visited は使えません。実際、ホテルに visit(訪問する)する人はまずいないと思います。それから、これを書いたときそのホテルに泊まっていたとか、ホテルを中心に考えているのなら I came to…でしょう。

もちろん、I went to…でもかまいません。

★「それから」は later の代わりに after that を使ってもいいでしょう。

★「二年後になる」の「…したのはそれから～年後になる」は普通、It was ~ years later [after that] that…ですが、参考までに言っておくと The next time I… was ~ years later [after that].も可能です。

■今度は冬であった。 (8504)

★「今度は」は this time で、文法的には文頭でも文尾でもかまいませんが、「(いつもと違って)今度は」という気持ちなら文頭です。

★「冬であった」は It was winter. しかないでしょう。

■伊勢の風は意外と冷たくきびしい。 (8504)

★「伊勢の風」の「風」は「外気」というニュアンスが感じられるので wind では強すぎます。breeze あるいは air の方がいいです。したがって The breeze [air] at Ise…ですが、「伊勢では風が…」と考えれば In [At] Ise the breeze [air] was…と書くことも出来ます。

★「意外と」は unexpectedly の他に、「思っているよりも(冷たく)」と考えれば(colder) than I had expected となります。

◆現在時制の日本語を過去時制に

★「(風は) 冷たくきびしい」と現在時制になっているのは、伝達動詞部分(I said to myself; I thought, etc.)を省いて書く日本語独特の手法で、「(風は) 冷たくきびしい (と思った)」の「思った」の部分を外して臨場感を出していると考えることができます。英語でも特殊な効果をねらって「いつものこと」などを一般論として現在時制で書く場合がありますが、実際にはまれにしか使われません。英語では過去時制にすべきでしょう。そのまま訳すと The breeze [air] was colder and severer than I had expected.となります (以下を参照)

●文技巧 (主観的形容詞を副詞に変えて処理する)

「(風は) 冷たくきびしい」の箇所は The breeze [air] was colder and severer than I had expected.でも文法的には間違いではありませんが、これでは日本文の真意が伝わらないような気がします。「冷たい」というのは風に対する一般的な表現であるのに対して「きびしい」はかなり主観的な感想です。もう少し掘り下げてみると「風が冷たい、だからきびしいと感じた」ということで、風そのものが厳しいということではないと思います。つまり、表現の層が違うのですから形容詞を A and B と並べても日本語の気持ちは伝わりません。こういう場合、英語では主観的要素を副詞に変えて、たとえば、The breeze was uncomfortably [unpleasantly] cold するといいのではないかと思います。そして「意外と」の部分は more than I had expected として続けるか、unexpectedly を使うかで、The breeze [air] was [struck] unpleasantly cold more than I had expected [colder than I had expected].あるいは、The breeze at Ise was unexpectedly, uncomfortably cold.とするといいと思います。

■しかし陽はうらうらと温く、部屋にいる限りそこには冬の気配も感じられなかった。

(8504)

● [しかし]

「しかし」は but でも yet でもよいし however また even so も使うことが出来ます。ただ however を使う場合には位置に注意が必要です。たとえば、The sunshine was, however, … では was を強調することになります。簡単な例で説明すると、My Father is not rich. He is, however, happy.と is の後に置くと、is not に対して is を強調することになります。これに対して、is の前に出すと、たとえば、My mother is not rich. My Father, however, is(rich). となります。ですから、ここでは The sunshine, however, was…の位置に置かなければなりません。

★ 「陽」は the sunshine; the sunlight; the sun's rays などです。

★ 「うらうらと温く」は音から判断すると眼氣を誘うような感じですが、国語辞典によると「うらうら」は「陽の光がのどかで明るいさま」ということです。となると mild がいいでしょう。これなら「きびしい」の反対になりますし、cold の反対にもなります。ただ mild には「明るい」という意味はないので「のどか」に比重をかけることになります。で、ここは mild and warm とするといいでしょう。warm には「明るさ」も入っています。

★ 「部屋にいるかぎり」は「自分の部屋にいるかぎり」とも「(誰でも) 屋内にいるかぎり」とも解釈できます。前者なら as long as I was in my room ですが、ここはことさら自分を主張する必要はないので so long as one was indoors がいいでしょう。indoors の代わりに in あるいは in one's room でも構いません。in the room は駄目です。まだ了解がとれていません。

★ 「冬の気配も感じられなかった」の「感じる・感じられない」には sense とか feel を使うことになります。日本語でよく「春を感じる」という言い方をしますが、これは「春の気配を感じる」ことです。英語ではこのような使い方は出来ません。したがって、ここで I sensed no winter.は駄目です。こういう場合の sense の目的語は抽象名詞しかありません。たとえば、I sensed no hesitation in him./ I sensed no lack of self-confidence in him./ I sensed no irony in him manner.のように。したがって、ここでは I sensed no sign [suggestion] of winter とか one had no feeling [sense] of winter あるいは There was no suggestion of winter./ There was nothing to remind one [make one feel] that it was winter. などとすることになります。なお、「気配」に touch (感触) を用いることはできません。

■私は若い女中さんに桐山さんのことを見ねた。(8504)

★ 「若い女中さん」ですが、たとえば、廊下などで通りかかった女中さんの一人に尋ねるのであれば a young maid です。しかし、ここでは文脈から自分の部屋にきた女中さんのようなので the young maid でしょう。

★ 「桐山さんのこと」は about (Mr.) Kiriyama くらいでいいでしょう。Mr.はなくてもいいと思います。「桐山さんのこと」は他にいろいろあります。how Mr. Kiriyama was going on でも間違いではありませんが、go on は happen の意味で使うのが普通ですから getting on

の方がいいです. getting along になると「最近、桐山さんはどう?(うまくやっているかね)」[元気かね]」という感じですし、また、What had become of Kiriyma になると「あの桐山さんどうしたの?」という意味になります。状況によっては可能でしょう。

■桐山さんは亡くなっていた。 (8504)

★「～は亡くなっていた」は若い女中さんの答えですから He had died, she said.ですが、she said はないほうがドラマチックな効果ができるように感じられます。なお、辞書で「亡くなる」を引くと pass away も出ています。この表現は「亡くなる」より euphemistic な感じになります。かなり微妙な問題を含んでいるのですが、たとえば、亡くなった時期がまだかなり近くて、直接そのことに言及する場合には He passed away at five o'clock this morning.のように使います。この場合は相手に対して本当に表現をやわらげようという気持ちが働いているわけです。ところがそうでなくて、ただ単に自分の主観的な気持ちから die とか dead という言葉を使いたくないという理由だけで pass away を使うのは少々大げさで普通ではありません。こういう婉曲的な言い回しはむしろ避けて、直接的な表現にしたほうがよいのです。He had died.は He was dead.とほぼ同じで使えるのですが、He had died.の方がなんとなくその時を思い起こすという感じが出てくると思います。完了形というのは主観的で、何らかの感情・感慨が含まれるのが普通です。それで、ここは He had died, she said.とします。

■まだまだ死ぬ年の人ではなかった。 (8504)

★「まだまだ死ぬ年の人ではなかった」は「まだ死ぬには若かった」と考えて、too young to die とするのがよいでしょう。「まだまだ」という強調は far too…とします。ところで、このままでは女中さんの言ったことになってしまいます。ここは明らかに筆者の考えを述べているのですから I thought とか I reflected を加えないといけません。He was [He'd been] far too young to die, I thought [reflected]. とすべきです。

■心臓が悪かったのだという。 (8504)

★「心臓が悪かった」は無冠詞で had heart disease/ had heart trouble です。disease は可算・不可算の両方の場合があり、たとえば、to get rid of poverty and disease とか Heart disease is the number one killer in that country.という場合は不可算名詞になります。この場合も同じで、一つの特定の病気ではなく一般的なものをさしているわけです。不定冠詞をつければ a heart disease とすると one kind of heart disease という感じになり日本語の意味と異なります。また have a bad[week] heart も使えます。

★「・・・だという」は、ここでまた女中さんの言葉にもどるわけで「女中によれば・・・」と考えて、according to the maid でもよいし、…, she said も可能です。また、この「・・・だという」は「・・・だそうだ」に相当しますので apparently という副詞も使うことが出来ます。

■私は暫くおどろいて言葉がでなかった。 (8504)

★「暫く」は for a while です。

★ 「驚いて・・・」に、ここで surprise (不意で驚く) を使うのは問題です。surprise という言葉は、非常に冷静で客観的な感じで、主観的な要素がまったく入らない表現ですから、「言葉がでなかった」という主観的な感情とちょっとずれるようです。ここは「悲痛」を意味する be shocked / be taken aback / be upset などがいいでしょう。特に、be upset は「悲しみ・怒り」(My father was very upset last night, because I got home late./ He was so upset that he cried)を伴うので、ここにふさわしいと思います。

★ 「言葉がでなかった」は too…to say anything とすれば日本語に一番近い表現になると思います。「驚いて言葉が出なかった」は speechless を使って Such was my surprise that I was speechless for awhile. としても間違いではありませんが、speechless は、主に「あきれてしまった：開いた口がふさがらない」という感じでよく使われる言葉です。